

柴 田 明 徳

LITTLE DORRIT

By

Akinori SHIBATA

SUMMARY

Dickens was in the first half of his forties when he wrote *Little Dorrit*. By that time he had established his reputation, and the proceeds from his novels were enormous. As far as one could see, it appeared he was satisfied in every way. From about the summer in 1853, however, he began to show signs of discontent and irritation, which may be attributed to his unhappy married life and his social maladjustment. In *Little Dorrit* we can detect the disillusionment and discontent which must have been felt by him about this period of his life.

In Dickens's novels, as may easily be explained by his experience in early life, we often come across descriptions of the prison. In this novel, however, the prison occupies a more important position than in any other of his novels. Indeed, the prison is made the main symbol of this novel. Dickens saw the world as a prison. The first half of the novel is mainly concerned with Mr. Dorrit's life in the Marshalsea Prison, while in the second half, although he is out of prison, he is figuratively none the less a prisoner. Furthermore, several important characters in this novel are also imprisoned mentally.

Little Dorrit, the heroine of this novel, is interesting, because she belongs to the tradition in the English novel of the Christian heroine, including among others Clarissa, Amelia, Fanny Price and Milly Theale.

Little Dorrit は 1855 年から 1857 年にかけての作品で、Dickens の四十代前半の作で、その直前の主要作品としては、彼は *Bleak House* (1852~53) と *Hard Times* (1854) とを書いている。これらは皆彼の四十代前半の作である。この時までには、彼の小説家としての才能は普く認められ、彼の作品は非常な人気を博し、彼はどこに行つても大歓迎を受けた。彼の作品からはいつてくる収入も莫大なもので、彼は金によつて手に入れることのできるものは何でも手に入れることができた。若い頃の教育の不足は海外旅行やイタリー語、フランス語を学んだりすることによつて多少は補うことができた。すなわち、彼の生活ははた目には何一つ不自由のない、幸福な生活のように見えた。しかし、1853年

の夏頃から、彼は非常な不満と焦躁の徴候を示し始めた。Edmund Wilson¹⁾はその原因を Dickens の結婚生活の不満と彼の社会的不適応の二つに帰している Forster の説を正しいと考えざるを得ないと言っている。

Dickens は十八才の折、一つ年上の Maria Beadnell というある銀行員の娘に熱烈な恋をした。この娘は軽薄な娘だつたらしく、しばらく交際が続き、彼女は若い Dickens にかなり encouragement を与えたようだが、娘の父親は Dickens を、家柄も悪く、将来の見込みも疑わしい青年と考えて、娘を説得して、結局彼の求婚を断らせてしまった。この時彼は二十一才になつていたが、これは彼に非常な屈辱感を与え、後に彼は *David Copperfield* の中で、彼女を Dora のモデルに使つたりしたが、この若い時代の痛手は長く彼の心に残り、彼女は彼が手に入れることができなかつた理想の女として、彼の心の奥底に留つていたようである。ずつと後になつて、Dickens は人妻となつた Maria に会うが、昔の面影はなく、肥つて、野卑な、愚かな女になつてのを知り、これを *Little Dorrit* の中で Flora Finching のモデルに使つた。しかし、その後、間もなく、彼は新聞関係の仕事をしていたスコットランド人、George Hogarth を知り、その長女の Catherine と婚約し、結婚した。Catherine は二十才、Dickens は二十四才であつた。この Catherine には Mary という妹があり、この娘は、Charles が結婚した時には、まだ十五才で、結婚適令期になつていながつたが、不思議に Charles の心を捕えた。そして、この娘は、Dickens 夫婦と共に一年ばかり一緒に暮した後、突然 Charles の腕にかかえられて死んでしまつた。Charles はひどく嘆き悲しんで、*Pickwick Papers* の執筆を二カ月も中断し、Mary の傍に埋めて貰いたいと言つたり、彼女の指輪を片時も指から離さなかつた。*The Old Curiosity Shop* の可憐な少女 Nell は Mary をモデルにしたものである。この事件一つを取つてみても、Catherine が Dickens の理想の女でなかつたことはかなり明白である。

Dickens の妻の Catherine は一体どんな女であつたのだろうか。これははつきり分らないが、知的にも情的にも Dickens に比べて劣つた女であつたらしく、この時分はすでに二十年間も彼と同棲し、10人の子供を産んでいたが、夫婦の仲はうまくいつていながつたことは確かである。そして、この頃になると、子供の世話や来客の接待などは Catherine に代つて、彼女のもう一人の若い妹の Georgina がするようになった。そして、遂に *Little Dorrit* を書き上げてから間もなく、Ellen Turnan との事件も起つて、彼は Catherine と別居するようになる。

このように Dickens は、家庭においても、幸福な生活を送ることはできなかつたが、彼はまた社会においても孤独であつた。彼はすでに富と名声を獲得し、ヨーロッパにおいて最高の文人と見なされていたが、英国においては真の意味において社会的地位を築いてはいながつた。彼はどん底の生活から身を起して、文壇の寵児となつたが、個人的交友としては、Carlyle を除けば、自分より劣つた人々に限られていた。彼は文壇の大御所となつても、上流社会の風習を身につけようとはせず、小説の中に現われる、上流社会に対す

1) Dickens: *The two Scrooges*.

彼の諷刺は益々顕著になつていつた。しかし、この当時の彼の態度は封建的特権に反抗する中産階級の過激派の域を出ていなかった。衆知の如く、彼は十二才の時、父の John Dickens が借金が払えず、Marshalsea Prison (当時は debtors' prison, すなわち、債務者を収容する監獄として使用されていた) に入れられ、家族ぐるみ監獄に移り、Charles だけ近くに下宿し、靴墨工場で働き、仕事が終ると監獄に行き、朝はまた監獄で家族のもの達と朝食を共にしていた。父親は四カ月後に遺産を貰つたために出獄することができたが、Charles は結局六カ月靴墨工場で働いた。これは幼い Charles に非常な屈辱を与えたが、この経験によつて、彼は下層階級の生活をかいま見ることになる。この六カ月の生活が彼に非常な屈辱感を感じしめたことによつても分るように、彼は下層階級には共感を持つていなかった。また彼の父方の祖父が貴族の家の head butler をしており、祖母もまた貴族の家の下女や家政婦をしていたことなどから、彼は上流階級の生活をかいま見ていたに違いない。しかし、上流階級に対しても、彼は共感を抱いていなかったことは明白である。彼の父は Navy Pay Office の下級官吏であつたから、彼の出身は下層中産階級といつてよいであろう。しかし、中産階級というのは幅の広いもので、また変動も激しかつたので、結局 Charles Dickens は中産階級の上層と下層の間の不安定な地位で人となつたと言えるであろう。このように厳然と区別のある二つの階級層の間に挟まれることは、——丁度、Henry James のように二つの文明の間に挟まれることと同じく、——小説家にとつて、小説を書く上からは、きわめて都合のよいことではあるが (何となれば、二つの階級なり、文明なりの対比を劇化し、一つの世界の居住者には分らない相互関係を探求できるからである)、実際の社会生活の上では、このために孤立した立場に追いやられるものである。結局、Dickens は奇跡的な功績をなしとげたにもかかわらず、家庭生活ならびに社会生活上の不満は、これによつて少しも補われなかつたのである。そして、この *Little Dorrit* ならびに *A Tale of Two Cities* に続く *Great Expectations* (1860~61) には Dickens のこの時期の幻滅と不満があらわれている。

Dickens の小説には監獄がよく出てくる。*Sketches by Boz* の 'Visit to Newgate' から、*Pickwick* や *Oliver Twist* を経て、最後の *The Mystery of Edwin Drood* に至るまで、監獄は一生涯彼の念頭を離れなかつたといつてもよい。これは勿論彼の幼時の経験が如何に強い印象を彼の脳裡に刻みつけたかということを示すものであるが、他の小説においては監獄は単に挿話的な役割しか果していないのに比べて、*Little Dorrit* においては Marshalsea Prison が物語りの中心となつているばかりでなく、監獄ならびに監獄の観念がこの小説を貫く *motif* となつている。すなわち、監獄がこの小説の *symbol* となつているのである。

Mr. Dorrit は自分がある事業に金を投資したということ以外には何も知らない事件にまき込まれて、負債の返済不能のために、Marshalsea Prison に収容される。彼の若い妻も二児と共に監獄に引き移る。間もなく彼女はここで一人の娘を産む。これがこの小説の女主人公の Little Dorrit である。この子が八才の時母は死ぬ。幾年か経つて、Mr. Dorrit は年をとり、獄中で 'Father of Marshalsea' と呼ばれるようになる。Mr. Dorrit はこの

名前に次第に誇りを感じなくなるようになる。彼は娘の Amy (Little Dorrit) がお針女として働きに出て儲ける僅かの賃金で養われ、彼女に優しく面倒を見て貰っているのに、その事実を目をつぶつて、自分が gentleman であるという snobbery を捨て切れない男である。しかし、二十五年の獄中生活を送つた後、彼は突然莫大な遺産を相続して、出獄する。しかし、長い間の獄中生活によつて、彼は普通の社会生活に対する適応性を喪失してしまつている。すなわち、財産を得て上流社会に出入するようになるが、入獄していたという事実を他人から気附かれることを極度に恐れる。娘達には行儀の先生 Mrs. General をつけ、その他下男下女など多くのお供を連れてヨーロッパを旅行して、豪華な生活をするが、昔のことを忘れようとしても忘れられない気持から彼が無理にとる尊大な、勿体ぶつた態度によつて、いつも馬鹿げた行動をする。ついに、ローマで宴会の席上正気を失い、自分が現在 Marshalsea Prison にいるという錯覚を起し、席に連なる人々を囚人と見たてて、昔の 'Father of Marshalsea' となつて演説をし始め、ついに倒れて、間もなく死ぬ。

この Mr. Dorrit は Dickens が父親の John をモデルにしたものと言われている。成程、見栄坊の点など表面的には似たところもあるが、Mr. Dorrit の無能な性格、屈辱感、紳士気取りなどの内面的な性格は John Dickens とは別個の、独立した character-creation であり、強いて言えば、自分の属する階級を見失つた Charles Dickens 自身の内面的な投影と考える Edgar Johnson²⁾の説の方が妥当性を持つと思う。Dickens には珍しい、微妙な心理的洞察を以つて、Mr. Dorrit が獄中生活によつて次第に偽りの誇りと道徳的な屈辱に陥り、現実の牢獄を出ることができた後にも、彼の心は、以前にも増して、目に見えぬ牢獄に繋がれている有様が見事に描かれている。

男性の主人公 Arthur Clennam は二十才の折、中国に送られ、父と一緒に商売をしていたが、父が死んだので、四十才の独身者として英国に戻つてくるが、英本国で仕事の管理をしていた彼の母（後に義理の母であることが分る）によつて冷めたく迎えられる。この Mrs. Clennam は薄暗い墓場のような家に住み、手足の自由を失つていたので、'黒い棺台のような長椅子に' ねているが、彼女はヴィクトリア朝の支えであつたところの Calvinism ならびにがめつい取引に凝り固まつた女である。彼女は Little Dorrit に、彼女が成年に達した折りに、莫大な遺産を与える遺書を握りつぶしている。この自分の家から一步も動けない Mrs. Clennam も事実上囚人であり、さらに彼女の心は誤つた Calvinism によつてとらわれている。彼女は心身共に二重に監禁されている。

金融業者の Mr. Merdle は色々な事業に手を出し、政界にまで這入り込み、すべての人々が彼の気嫌をとるが、妻からも召使いからも愛されぬ孤独な男である。危つかしい企業のやりくり疲れはてた彼の姿もまた囚人を想わせる。彼はついに事業の破綻から自殺する。彼は金銭という牢獄に繋がれていたのである。

貧民窟 Bleeding Heart Yard の住民もまた貧乏のとりこである。彼等は職人や労働者や小売店主であるが、ここの地主の Casby は差配人の Mr. Pancks に家賃の取立てを苛酷に行わせながら、自分は慈悲深い紳士を装っている。彼は最後には Pancks に背かれ、

2) Edgar Johnson: *Charles Dickens; His Tragedy and Triumph.*

ここの住民の目の前で真実を暴露される。

大体 Dickens の小説は時事問題に関係があるものが多い。この小説の構想はクリミア戦争の最中に行われ、Dickens は戦争の成り行きに多大の関心を持ち、また友人 Layard の行政改革運動にも熱意を示し、1855年5月に結成された **Administrative Reform Association** にはそのメンバーになつている。彼はこの作品の中で、当時の社会の悪弊をえぐり出そうとしたのであるが、失敗が暴露されても、大臣達はその責任は必ず他に巧みに転嫁し、結局誰の罪でもないと答えるであろう。この小説に対して Dickens が最初考えた題名が *Nobody's Fault* であつたのはこのような意味があつたのである。

Dickens の社会批判は **Circumlocution Office** (繁文縷礼省) に集中されているが、これは特殊の省を意味せず、むしろ政府全般を指したものである。すなわち、外交、商工業の規整から発明に対する特許の許可などを含むものである。すなわち、官僚制度が複雑化し、著しい能率の低下を招き、どこに責任があるのか分らない。この因襲になづみ、私利私欲に利用された政治制度の動脈硬化を Dickens はきわめて皮肉に、しかも抽象的に描いているが、具体的には、実際はかなり甚しい悪弊が行なわれていたらしく、Dickens の諷刺はあまり誇張ではなかつたらしい。この **Circumlocution Office** をあやつる代表的人物は **Barnacle** 一家である(因に *barnacle* という語は普通名詞では、波止場や船底などにつく‘ふじつぼ’などの貝類で、‘地位にへばりつく人’、‘厄介者’などの比喩的な意味を持つている)。彼等は *aristocratic bureaucracy* の権化である。そして、この **Barnacle** 一家に寄生虫のようにまつわりつく人々がある。この一家の遠縁に当る **Gowan** 家の未亡人 **Mrs. Gowan** は **Barnacle** 家のお蔭で、年金を貰つて生活しているが、息子の恋人 **Minnie** の属する **Meagle** 家の人々を、自分達より裕福であるにもかかわらず、軽蔑する。息子の **Henry Gowan** は道楽者で、**Barnacle** 家の人々が遊んで暮していけるだけの俸給のついた閑職を与えてくれないので、その面当ての気持から、画描きになる。そして、**Barnacle** 家の人々が彼の画を買い上げたりして、彼を流行画家に仕立ててやろうとしたが、元来怠け者の彼は結局失敗する。彼は道徳的誠実さを全く欠いた人間である。

この **Gowan** 家の人々によつて、家柄がないこと、あるいは商売に従事していたとの理由で、軽蔑される **Mr. Meagle** は隠退した銀行員であり、娘が **Henry Gowan** を婿に選んだことを喜んではいないが、そして、**Barnacle** 一味の人々が国家を食物にしていることを承知していながら、自分の家の party に **Barnacle** 一門の一青年が出席したことを光榮に思う。

このような支配階級によつて治められている世の中が牢獄であるばかりでなく、人々は己れの心中にもつ観念によつて心理的にも監禁されているというのがこの小説の重要な点である⁹⁾。

作中人物の一人 **Miss Wade** は自分が私生児であることから、誰からも愛されるはずはないという *neurosis* に陥つて、反社会的になる様子など **Freud** に先んじたものと言つて

-
3. Dickens の小説には初期のものからすでに象徴的な要素があるが、後期の作品になると、この傾向が強くなるように思われる。

よいであろう。また、この小説には完全な悪人は出てこない (Blandois というフランス人は悪人であるが、この小説の筋から言えば、さして重要な人物ではない)。Mrs. Clennam も間違つた Calvinism の犠牲者と言つた方がよい。前半の舞台をなす Marshalsea Prison は単なる監獄ではなく、世の中の縮図である。Mr. Dorrit は富を得て Marshalsea から抜け出るが、結局 Barnacle や Merdle の支配する別の監獄に入るに過ぎない。このような世界において幸福はほとんど望めない。唯自己の利益を考えず、社会に献身しようとする技師 Daniel Doyce が作者の批判を完全に逃れているに過ぎない。この小説の雰囲気は暗い。

最も作者の分身と思われる節のある Arthur Clennam は厳しい宗教と富の獲得に専心する父母の許で、青春の楽しみを知らずに中年となり、二十年の中国生活からロンドンに帰つて来て、母の Mrs. Clennam と会うが、彼の気持は非常に pessimistic で、Mrs. Clennam が Mr. Dorrit の入獄と関係があるのではないかという疑惑を抱き、Mr. Dorrit の出獄のために奔走する。彼もまた Merdle の銀行の破産によつて Marshalsea Prison に入る。終始一貫して、彼は非常に pessimistic である。彼は最後に Little Dorrit と結婚するのであるが、彼等の結婚には全然 passion は感ぜられない。‘彼等は世の中のためになる、幸福な、簡素な生活にはいつた’ (Went down into a modest life of usefulness and happiness) と作者は言っている。

さて、最後に、その Little Dorrit であるが、彼女は獄中で生まれ、金使いの荒い、怠け者の兄や、粗野な姉と違つて、無力無能な父親によく仕え、全然欠点のない娘である。このように人物を理想化することは realism から離れることは確かである。しかし、Dickens はこの小説において、この少女の個人的生活を描くことを以つて目的としたのではない。彼の目的は社会を象徴的に描くことにあつた。そして、家庭生活にも、社会生活にも満足できず、絶望に陥っている作者が、暗闇の中にかすかな光明を求めるように、追求したものが、男性としては Daniel Doyce のような人間、女性としてはこの Little Dorrit であると言えないであろうか。小説家は何も現実を写真のようにそのまま描かなくてはならぬという鉄則があるわけではない。理想の社会、理想の人間を想像することは、むしろ小説家、否人間の貴重な性質である。Lionel Trilling⁴⁾は、Little Dorrit は Dickens の Beatrice であると言っているが、実際彼女は Christian heroine である。彼女は、‘心の貧しき者’、‘柔和なる者’である。彼女は身体も小さく、余り健康も勝れない。この点も十八世紀から、Clarissa, Amelia と続く Christian heroine の伝統に合致する。Lionel Trilling は Jane Austen の *Mansfield Park* の女主人公 Fanny Price を論じた個所で⁵⁾、このような欠点のない人物は現代では余りはやらないと言ひ、Henry James の *The Wings of the Dove* の女主人公 Milly Theale を以つて終りを告げると言っている。しかし、この Little Dorrit という女性像は中年の pessimism に陥つた Dickens

4) Introduction to *Little Dorrit* in the New Oxford Illustrated Dickens.

5) ‘Jane Austen and *Mansfield Park*’ in the fifth volume of the *Pelican Guide to English Literature*.

が絶望の中から、あきらめのような気持で求めた道徳的、宗教的な女性像として、われわれの興味を惹くものがある。